

【資料】

沖ノ山炭鉱機械係・香川愷太郎回顧録

三 浦 壯

沖ノ山炭鉱（山口県宇部市）は国内有数の海底炭鉱であり、UBE株式会社（旧社名・宇部興産株式会社）の前身企業であることはよく知られている。これまで同炭鉱の経営に関わる書籍は数多く出版された。他方——沖ノ山炭鉱だけではなく宇部石炭鉱業全般にも関わることだが——トップマネジメント層については出版物が豊富にそろっているものの、ミドルマネジメント、およびそれ以下の人材に関わる情報は概して乏しく、なお未解明の部分が多い状況にある。今回紹介するのは、沖ノ山炭鉱の機械係を務めた香川愷太郎（かがわやすたろう、不詳-1941年）が1934（昭和9）年10月から同年12月にかけて地元新聞の『宇部時報』に寄稿した自伝である。「香川豫山」の署名、「昔語り」の標題で連載され、掲載総数は22回である。22回目には続きがあるかのような（しかも石炭産業史上は高い期待が持てる）文章で終えているが、23回目以降は確認できない。何らかの事情で連載が休止されたものと推測される。

香川愷太郎とはどのような人物か。『香川昌子伝』によれば、愷太郎の父、行侃は愛媛県矢野崎村で私塾を開き、後にそれを母体とした小学校の校長となり、郡内各地を小学校長として転任した人物で、実妹は香川裁縫塾（後の学校法人香川学園）を創始した香川昌子である。愷太郎は愛媛県八幡浜で幼少期を過ごし、松山師範学校に入学し、卒業後は愛媛県下で職を得た後、師範学校時代の学友で「船木裁判所の判事であった義兄の」大宅伊敏の斡旋で山口県へ転入し、藤山村立尋常小学校校長に迎えられた¹。「和漢の学問を修めたばかりではなく、当時としては数少ない英語の修得者」で、「彼の語学の能力は、宇部産業人にも高く評価され、藤山小学校を退職したのちは、渡辺祐策の経営する沖ノ山炭鉱に職を得て、その才能を実務に役立てている」とされている²。

石炭産業史の側面からみると、香川は、『俵田明伝』において「前任の機械係」の「骨の髄からの蒸気論者」として、炭鉱機械の動力電化を志向する俵田明と真正面から対立する様子が描かれている³。最終的に坑内動力は電化が進行する流れになるわけであるが、それ以前、および電力への移行期間において炭鉱の機械設備の動力源は蒸気力に依存、もしくは基盤のひとつであった以上、石炭産業史上は香川の役割を無視することはできない⁴。しかし、この点については『俵田明伝』から読み取ることは不可能である。

¹ 上田芳江編著『香川昌子伝』（香川学園藤花会、1963年）3頁、22-23頁。なお大宅の実妹と愷太郎の結婚時期（義兄となった時期）については不明である。

² 前掲上田（1963）、17頁。

³ 俵田翁伝記編纂委員会『俵田明伝』（宇部興産株式会社、1962年）56-57頁。

⁴ 1918年1月の沖ノ山炭鉱職員一覧の標記順はまだ、香川が俵田よりも上位に位置している。「宇部名鑑」（『宇部時報』1918年1月1日所収）。

以上をふまえて、今回紹介する資料の貢献を整理すれば、明治後期から大正初期の沖ノ山炭鉱および宇部石炭鉱業において、①炭鉱機械系の技術者人材がどのように育成・調達されたのかが判明し、さらに、②採掘現場の命令系統（職務分掌）の在り方、③明治中後期における宇部社会の様子についても具体的な情報が記載されていることに集約できる。

実際に読んでいただくことが望ましいが、現時点の筆者の研究上の関心にそくして、①・②についてのみ簡単に要約することで、資料紹介にかえたい。

香川は1900（明治33）年2月に宇部村の隣村、藤山村に移住した（4）。藤山村に在住中は沖ノ山炭鉱棟梁の佐藤清太郎⁵と交流を持ったようである（9）（10）（11）。佐藤が読解できない機械カタログの説明を求められた際、香川は「実地的知識を欠いてゐるので、只文字の通り訳して聞かせた」という（11）。その後、1904・05（明治37・38）年、香川は愛媛県松山の従兄が経営する印刷会社の経営に参画したが、事業はうまくいかなかったようである（7）（8）。他方、そのころ沖ノ山炭鉱の経営は飛躍を目指す域に入り、宇部で面識があった渡邊祐策が「相当文筆の出来る人」を求め、「技術方面では第一坑内外の測量機械部の大略、並に監督署向往復文書の様な事を受持つ人が一人ほしい」と考えていることもあり、渡邊が香川に沖ノ山炭鉱入社を提案をした。このとき香川は「其内測量のことは、理論はそうむつかしきものでも無く、嚙実地の練習が緊要と考へ」そこまで難易度が高いと判断しなかったが、「汽機汽罐のことや石炭坑の概略は中等程度」の知識しかなかった（8）。この点については渡邊も承知しており、「費用の点は相当の補助」をし、渡邊自身が東京に在住である旧領主・福原俊丸に依頼し、同氏の人脈を利用することで、測量については順天求合社の紹介を受け、機械は月島機械製作所への斡旋が決まった。

測量については「学科は主として各種測量器具の説明、測量実施要論の外、数学は代数及三角法の初歩位で別に骨の折れることもなく」、「科外として自宅製図を課し」、主要な勉強は「各種測量法の実地練習」であった。機械については製作所の「一室に奇寓」し、「初めはトレースより、後に簡単な機械部分の設計製図、終りには汽筒其他の稍複雑なるものに進」み、「其間工場に出て、各職工の作業を見学することもあり」、「学科は設計室にある書物を借り受け、又自分に購入した」とされ、これにより「機械一ト通りのことは覚えた」という（13）。最後に常磐炭鉱にて実地研修が行われ、特にポンプの重要性と工夫の余地について思考をめぐらせたようである（宇部で初めて高水頭ダービンポンプを沖ノ山炭鉱へ香川が導入し「相当の能率を挙げ得た」たことも記載されている）（14）。

これら遊学の期間は、回顧録から推測すると1905（明治38）年10月から1906（明治39）年3月のおよそ半年間と推測される。以上のことは、明治後期の沖ノ山炭鉱が、炭鉱について専門的な熟練

⁵ 弓削達勝『素行渡邊祐策翁 乾』（渡邊翁記念事業委員会、1936年）によれば、佐藤清太郎は渡邊祐策が社長となった村崎鉄工所（1895〔明治28〕年3月）の株主であり（126頁）、本山炭鉱（1897〔明治30〕年創立）で渡邊から意見を求められ（140頁）、沖ノ山炭鉱の創立に参画した（162頁）。1899年初頭、経営困難に陥った沖ノ山炭鉱について渡邊に事業継続を勧める描写もあり（176頁）、渡邊の「股肱」と表現されている（162、176頁）。

に乏しいけれども、読み書き計算能力について高い修養があり、習熟能力を有する人物を地域の中で探索（情報を取得）し、在京の地域人脈を活用して座学・実地を組み合わせるかたちの専門教育を施すことで、近代的な炭鉱経営に必要な技術者を確保したことを示している。

宇部炭田（沖ノ山炭鉱）において機械係の能力を持つ人物は、香川以前では、宇部村の隣村である厚南村南部炭田の雀田炭鉱（頭取・藤本治助）及び築島炭鉱（頭取・笠井喜代松）を経ていることも述べられている。雀田炭鉱では「汽機汽罐を採用し、以て機械部を分設し、職長修繕方等の名称及其職務を創始」され、これらの人物は「三池炭鉱、筑豊炭鉱等に於て実地の見習ひを経て宇部に輸入せられしもの」で、実地で得られた職能をもとに、宇部の各種炭鉱でミドル以下の層として雇われたようである（9）。香川はこれを「正則に機械学をやつたことも無く、教育は僅かに小学校位に過ぎず、唯三池、筑豊地方の炭坑にありて実地の見習を続け、機械の取扱方を覚え得た人々にして、極低級の技能に過ぎざりしも、当時の宇部炭坑の程度では恰好の人々であり、又是以上の人を求むることは至難の状況にあつた」と分析している（18）。

最後に職務分掌について触れたい。沖ノ山炭鉱の採鉱部（地事務所）の社員には出納掛、棟梁、帳簿係、買入係、監量係、外雑係がいた。坑夫の雇用制度は納屋制度であり、「賃金の支払、人事上の取扱等、悉皆此納屋頭」との交渉事項であった。棟梁⁶は採鉱関係の職務を担当したと思われるが、「機械係も棟梁の兼務」とされ、修繕方、捲方、火夫、ポンプ方等の機械取扱品人は「納屋頭と同意義である職長」の請負に帰しており、職務は未分化の状態にあった（16）。そのため、佐藤清太郎が「機械部の事にまで熱心に調査を進め、常に改良と進歩の精神に充ちて居た」ことは、彼自身の沖ノ山炭鉱への貢献度をより高め、後年の評価に寄与した可能性もある（11）。1907（明治40）年1月の総会終了後、当時まで棟梁の兼務であつた機械事務を分割して別に機械部を置くことになり、香川は機械係に就任することになった。その職務は「炭坑の機械係は職長の相談役」で「技術は職長の責任となつて居るから、唯皆の者が油断をせざる様督励」するというものであった（18）。香川の回顧を文面通り読み取ることが許されるならば、沖ノ山炭鉱における炭鉱の機械取扱業務を行うものは、機械係（社員）→実地経験を基礎とする職長（請負）の階層構造で把握できることになる。

香川によれば、この時の職長は岸崎秀一（厚南村築島炭鉱職長・小柳忠太郎の下に修繕方を経験）で、その他の者も宇部の各炭鉱（見初炭鉱、長陽炭鉱、濁炭鉱）の職長経験者であり、「宇部に於ける炭鉱機械取扱の草分即開拓者」で「宇部の炭鉱史を編む時は其名を逸すべからざるもの」とされた。岸崎は1918（大正7）年1月の職員一覧で俵田明に次ぐ3番目の機械係として名前がみられ

⁶ 棟梁は、堀田山炭鉱（1890〔明治23〕年創立）においては「請負はせた」などの表現が文献上はみられ、そこで出てくる氏名は、後年起業された沖ノ山炭鉱の株主人名簿には掲載されていない（前掲弓削〔1936年〕、88頁、163頁、177-178頁）。他方、前蛭子炭鉱（1895〔明治28〕年創立）では棟梁・松谷権六は四斗の株式保有者であることが確認され（『前蛭子炭坑諸書類綴込』入江家文書5、学びの森くすのき所蔵）、沖ノ山炭鉱の株主にもなっており、沖ノ山炭鉱の棟梁である右田秀之進、佐藤清太郎も株主であることが記録されている（前掲弓削〔1936年〕、88頁、163頁、178頁）。

るが、学校歴の有無は不明である⁸。資料によれば、職長間で実地教育というかたちによる機械取扱技術や、機械設備の効率を高める創意工夫の伝承がなされ、なかには権威者の扱いを受ける者もいたことも判明する（18）。

本資料を読むに際しては、『香川昌子伝』（香川学園藤花会、1963年）、『素行渡邊祐策翁 乾』（渡邊翁記念事業委員会、1936年）、『俵田明伝』（宇部興産株式会社、1962年）、『宇部興産六十年の歩み』（宇部時報社、1956年）を参照することも有効である。併せて勧めたい。

1. 原則として旧字は新字に置き換えた。
2. 適宜句読点を補った。
3. 原本の体裁（改行の有無、文頭1マス空け）は原本の状態を維持した。そのため、連載回別による体裁は一致しない

付記：本稿の資料について、宇部市立図書館から閲覧の許可を得、複写についてご厚意をいただきました。深くお礼申し上げます。なお、本稿は令和4年度科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号：21K01600）による成果の一部である。

（1）掲載日：昭和9年10月30日

題して昔語りと云ふも、其大部分は明治三十八年より大正十年に到る、余が故渡邊祐策翁の幕下にあつて犬馬の勞を致したる其間の実歴談である。従つて本文中翁に関するところは、即ち翁が伝記の一部を成すものなれば、顧みて其筆責の重大なるに想到し、一字一句苟くせず、而も阿らず又飾らず、坦懐率直を旨として、唯牢乎たる余り記憶に存する正確なる事歴を記述せんとするものである。若夫れ文辭の拙劣なる、命意の粗笨なるが為に、翁の徳を損するあらん時は甘んじて其罪を受容するの覚悟なり。尚余は此記述に先き立ちて、一般伝記の編纂に対する余が抱懐の一部を述べんとす。読者に乞ふ。之を諒とせよ。

余は青年の時、始めてフランクリンの自叙伝（アウトバイラグラフィキー、ベンジャミンフランクリン）を読み、其記事の卒直にして赤裸々なるに感じ、嗚呼是れなり！是れなり！と思はず嘆嗟の声を発したが、其後普く新井白石の著書を涉獵するに到りて、同じく彼の自叙伝たる（折焚く柴の記）に接し、其稀世の名文なると秋霜烈日の如き気魄に魅せられて、再三之を耽読したことがある。米國独立の志士であり、又大發明家であるフ氏は、其自伝を叙するに毫も虚飾自賛と思はるゝ節無く、酒々落々と之を記すところ、何んとも云へぬ床しさを覚え、終始会心の笑を禁じ得なつた。何事にも自我尊主義なる欧米人の中にも、此様な高潔な人間があつたかと竊にあやしむ位であつて、伝記を叙する自他孰れを問はず、須らく如此なるべしと深く感じたのである。白石の自叙伝に

⁷ 注4に同じ。

⁸ 給与形態は、岸崎は1919（大正8）年下半期において月給支給、香川、俵田は日給支給であったことが記録されている。前掲弓削（1936年）535-534頁。

至つては、之れとは稍其趣を異にするも、当時市井に放浪せし一儒生が偶然明主の知遇を受け、一旦廟堂に立つや、一命を賭し断乎として幣政改革の衝にあたり、之を成功せしことは、当時の社会状態としては非常の難事なりしも、畢竟彼が透徹明朗なる頭脳と何物にも屈せざる、何物をも畏れざる、誠意誠心の迸りと云はざるを得ず。

天は此明王に向つて永く年を与へず、其死と共に其職を退くにあたりては、彼は其尤も趣味に適せる、歴史と制度の編著に没頭して、又他を顧みず、等身の貴著を完成し、腐敗平凡化せる当時の学界を刺戟し、以て徳川期の文道に未曾有の貢献を与え、其余勢は遠く明治に入り、今尚学界に光彩を放つてゐるが

実に余が此折焚く柴の記の再読三読は、確かに余が性格の一部を形成し、牢乎として抜くべからず。是れ余が今空しく窮盧に枉屈する所以でもあるが、顧みて一事一物につき、多少貢献をもたらしたる所以でもある。要するに伝記は自他に論多く、フ氏の如く白石の如く、卒直ならざるべからずとは、余が伝記に対する一大信念である。

(2) 掲載日：昭和9年10月31日

然れども近年余が眼に触れたる邦人の伝記なるものは、如此理想に適するもの寥寥晨星の如く、美は飽く迄誇張し、醜は全く拭ひ去り、其結果其人は神の如く仏の如く高く之を祭り上げて仕舞ふ。維新以来、多少でも世に著はれたる人々の伝記は、夫これ汗牛充棟にして、人によつては大同小異のもの十数種に算するに到る。併し孰れを見てもフ氏の如く白石の如く感激に価するものは殆ど無い。恰神社仏閣名僧知識の縁起絵巻物を繰りひろげるよふで飯を禁じ得ないのである。兎も角、我邦人は伝記好きと云ふのであらふ。少しばかりで頭角を顕はしたる人には伝記は付きものである。西郷、大久保、木戸、伊藤、山縣の諸公は勿論のこと曰く、加藤高明伝曰く、犬養毅伝曰く、何曰く何迎も応接に違がない。今余が机辺には江木千之伝あり、山縣素空伝（山縣伊三郎）もある。両書とも中々の大冊に出来て居るが、金を出したものでも又態々借りて来たものでもない。素空伝など頗るの美本で随分金のかゝつたものであらふ。而して読んでも何の感激も起ら無い。是等は畢竟悪しき意味に於ける洛陽の紙価を高からしむるものでは無いか。

論語は其高弟達の手になりし孔子の言行を認むべき唯一無二の編纂であつて、孔子教の中心を為すものであるが、而も徹頭徹尾孔子の尊崇と礼賛には終つて居ない。所々其対立論の片鱗を現はし居る。イエスの福音書も又然りであることはウエルス等も屢指摘して居る。世界の大神、孔子、イエスの伝既に然り、況んや其他凡人をやである。繰返して云ふ。伝記を草すること須く冷静一番なるべし。一切の情熱的狂曲から浄化された真实性を望むと共に、流動常無き複雑なる人間の表現を要求する真实性を失ふた絵巻物的伝記は、一次的事物に過ぎず、遠からず飽かれ棄られて、古本屋に店頭に曝らし物となる。如此は、畢竟伝記其人に対する大なる不忠実、心得違ひでは無いか。成功失敗奸邪忠直共に赤裸々に序すことが伝記の本領であつて、又其伝記の生命を長くする所以である。

常に云ふ。今どきは伝記編纂の流行時代でもあるか、此処彼処に其計画あることを耳にする。余が同郷の旧友にして、今春癌を病んで逝ける衆議院議員清家吉次郎の伝記編纂会も東京に於て組織せ

られ、其発起人乃至実務委員としては、郷里は勿論、政界、財界、学会等の各方面の名士より、苟くも彼に交際ありし種々雑多の人までずらりと顔を並べて居る。嗚呼盛んなる哉で、余も又其旧友の名誉を悦ぶものであるが、余り大袈裟で却つて其結果を氣遣ふ点もある。併し彼れに交際ありし人は、親疎を問はず、賛否恩怨を論せず、一切を網羅して居る処に如何にも其度量の寛宏にして磊落なることを示して居るに敬服する。希はくは真実なる肯綮を失せざる此旧友の躍如たらしむべき伝記の完成を希望して止まないのである。

(十月廿七日稿)

(3) 掲載日：昭和9年11月1日

(一)

十里是緑浜 洗沙日照銀
 十八公族族 繁榮千歳春
 年々桃花酒 友誘上巳辰
 酣醉起歌舞 倒転如狂人
 狂人君休笑 好最幽愁消
 使我如公木 同契百会招
 不似是似彼 人生輕桃夭
 風雨其飄汝 盛時不保期

(佐貫松琴)

(二)

なんば押せ〜押しやこそあがるよ——あがりやこがねの花がさくハーヤットコ〜

(三)

七つ八つからかんでらさげて——坑内さがるもおやのばちハーヤットコ〜

余が郷里を出て当地に移住せし明治三十三年頃の宇部の光景は、右に掲ぐる詩及び俚謡にて殆ど云ひつくされたり。(一)の藤山の名士、故佐貫正一、號松琴が上巳の節句に宇部の海岸をピクニックしたる時のもの、(二)、(三)は原始的採炭法の名残、所謂(たふほり)時代南蛮車押の唄であり、而も代表的のものである

東は宇部岬より西の藤山村堺助田鼻に到る一里余の宇部湾は、実に須磨明石も物かは云ひたげなる白松青松にして、帆船漁舟三々五々こゝかしこに行き交ふ有様は、一福の絵の如く誠に長閑なる風景であつた。陸地には亦広き黄葉緑麦の裡に点々として連なる藁葺小屋から聞こゆる乙女の唄ふ鄙びたる南蛮唄は、他国には全く見られぬ。此の光景は遊子の客愁をそゝる深きものがあつた。しかし一面勞資感情の対立は早くも此唄にさえ現はれて居る。(二)は炭鉱の礼賛にして資本家側の稼働者懐柔詩とも見るべく、(三)は稼働者側の真実悲痛なる叫び声とも云ふべし。実に設備不完備、危険極まる地底に下り、唯一の手灯をたよりとして鶴嘴をふる坑夫の生命こそ風前の灯なり。落盤

…出水…失火…等朝夕をはかれず同情万々である。序に云ふ、先年此南蛮唄を広く社会に紹介せんが爲、東京から態々高い給料を出して野口某とか云ふ作曲家を呼びたが、何がさて入手がすぎて以前の唄とは似ても付かぬ変挺なものが出来上り、一二回はラジオにまで放送したが、情味が全く違つたものとなり、地方人の頭にピリツと来らず暫時で全く腐れて仕舞つた。所謂角を矯めんとし牛を殺した類で笑止千万である。宇部の地の底から自然に湧き上がり長い歴史を有する唄を充分に地方情味のわからぬものに一任する、からかくの通り大馬鹿の骨頂である

(4) 掲載日：昭和9年11月2日

本号から目的の記事に入る筈であつたが、猶ほ一二鶏肋の肉があるから之を片付ける。明治三十三年二月移住後、始めに接せし宇部紳士は濱の故名和田一平氏であつた。藤山村長たりし故名和田松太郎氏の同伴にて訪問歓待を受けた。談柄として格別覚えぬが、二十六七歳とも見える温厚の若紳士、其優雅なる風采は頗る好印象を与へた。同氏は其後間もなく病歿せられ悼惜の感にうたれたこともあつたが、何故か此日のことは今に記憶に明瞭である。丁度若者の初恋のやうなものであらう。次には藤曲の中村直輔氏の東道で紀藤宗助翁の来訪を受けたことであるが、是は当時妹女が南画の彩筆を弄しつゝあつたからそれが為で、余には間接のお客であるが、何が扱音に聞こえし宇部一流の門閥素封家の老主人のことであるから、まだ地方の事情に馴れぬ当分のことではあるし、至つて恐縮した。しかし服装の質素なる対話の淡泊なる気取りた様子の微塵もなき風采は是も好印象万々であつた。

次に今尚強き記憶に残ることは、同年（明治三十三年）十月寺の前なる宇部尋常高等小学校の増築校舎が落成して、其祝賀式の席末を汚したことである（当時宇部には此小学校が只一つ）。県知事は例の手八丁口八丁の古澤滋氏が来て居り、又福原俊丸氏が男爵を貫はれた当分の事で幾歳であつたか。まだ令夫人も迎へられぬ誠にうら若き貴公子で臨席せられたが、紀藤国吉らの元老を始めとし、村田村長其他の有志連が此の若き貴公子を繞りて慇懃鄭重を極むる様は、尚旧藩時代君臣の情誼を今に見るが如き光景にて、余も自然に余と同庚なる旧藩主のことに想到し感涙を禁じ得なんだ。翻つて、今日同男爵の境遇に対し時世人事の変遷成敗利鈍の所為とは云ひながら同情を禁じ得ず、滄桑の感無きを得ざるなり。宇部人士以て如何となす。

古澤知事も又頻りに此貴公子に愛興をふりまき、朗読せし祝文の要旨も殆んど福原家の礼讃謳歌の多いことであつた。此知事の祝文より福原男爵の演説、其他来賓諸氏の祝詞に次ぎ余にも何かやれと云ふことであつた。勿論宿考は一つも無い、其のうち以上の祝詞演説等が概して御座なり、例の賛賛褒詞菌の浮くやうなことばかりであつたから、勧められるをきつかけに例の性癖がむくくと湧き起りピリツと来た辛味を加へて一席弁じたのであつた。勿論變つた明説でもなんでもない。其要領を云へば

このたび増築された新校舎は稀に見る立派な堂々たるもので結構至極であるが、申す迄もなく此校舎を育つ生徒に対しては、村当局は勿論、直接教育に当らるゝ教員諸氏の熱心と誠意とによつて質実剛健なる教育を施され、立派な宇部村の歴史を彩る人物の輩出を希望する次第である。折角よき鳥籠が出来ても、其中から雀や雲雀ばかり育つやうでは遺憾至極である。願はくばよき鶯の続々育

つやうに願ひしたいのである云々……と云ふのであつた。列席の宇部紳士連は定めしナンダ他郷から来た青二才めが生意気なことを云ふなと思つたであらう。是から幾日かを経て某氏に逢つた時、其人の言に君が先日の演説は随分思ひ切つたことを云ふたものじや、君の只の鼠ではあるまい云々……褒めるのか貶なすのか薩張り判らぬが、多少み気色を損じたやうに感じられた。(此項次号へ続く)

(5) 掲載日：昭和9年11月2日

○前号宇部小学校増築落成式(明治三十三年)の続き

同日式果て、将に帰途に就かんとする際、国吉明信翁が余が前に現はれて、君！今日暇があるなら寄り給へ、お茶でもいれよう云々。老翁折角の好意早速お請をして、島の同翁邸に行つたが、翁は既に帰宅せられて居り、直ちに別室の得鳳楼といふに伴はれた。室に入るや否や貫名海屋の書いた得鳳楼の扁額と床の間に毛利重就公の和歌の掛物が眼についた。此額は(為長藩福太夫)と為書してある。(福原の原が落ちて居るのである)。枯鍊遵勁無類の上出来でや、暫し凝視した。余は従来海屋の額は沢山見たが、未だ曾て此の様なものに逢つたことがない。先生も大藩老職の依頼と云ふので一層緊張したのであらふ。翁は得意の顔付で、滔々此得鳳楼の由来を弁じ立てられたが、次に余は床の間の福物を指し、重就とありますが、此の方は長府から出て、本藩を嗣がれ、藩財政の大改革を断行せられた英主でありませぬかと尋ねたら、翁の曰く君は遙か他藩の人、殊に未だ若いのに能く知つて居られる感心じや云々と全く子供扱ひ。少々辟易仕つたが、それから此重就公の財政々策其他の功績に就て滔々数千言と云ふ勢ひ……条理整然として些の矛盾撞着なく、其頭腦の明晰にして記憶の確かなるには、ほとゝ感心した。談話はそれから夫れと果てしなく続き、終りには教育談に入つたが、翁は矢張り吉田松陰流の鍛鍊教育気節教育主義で、当時次第に頭を擡げんとしつゝある機嫌取り教育主義を排斥して居られた。勿論、所説多少粗笨にして保守的の傾向は免れぬが、兎も角も要領を得たる話し振であつた。此の初めての会談に於て、翁の態度の鷹揚なことから考へ合せて、此人も唯の鼠ではあるまい。何れ宇部一流の人物であらうと見込んだが、後で人から翁の経歴を聞き、なるほど、領づいた次第であつた。其後、二三回訪問したよふに思ふが、いつも歓迎を受けて例の滔々たる談話の花が咲いた。何処にか性格に似よりの点があるかも知れぬ。あるとすれば、何れも少々つむじ曲りのあたりでもあろう。翁の人格に対しては俗物の眼から見て多少の欠点もあり、又批評もあらうが、兎に角現時に於ても殆んど見当らず、尚宇部一流処の人物であることは失はないと考へて居る。

(6) 掲載日：昭和9年11月7日

前号の紙上には叙事の余勢として、故国吉明信翁の人物寸評を試みたるが、是れを渡邊翁のそれと比較して考ふる時は、人物検討学上の一原則に達するのであるが、是は後章に譲りて、話頭を転ずることゝする。蓋し伝記や歴史の編纂は其人其事の直後では、種々たる障碍や圧迫が付き纏ふて、厳正の批判を通過したる真正の史伝は書にくい。少くとも六七十年乃至百年を経ねばと云ふのが史

伝家の述懐であるが、冒頭に主張したる——一切の情熱的扭曲から濾化された真実を望む——の理想はなか／＼達し難い。近し例を取れば、第一我明治の維新史が祖上に登るのである。由来薩長の天下によつて手前味噌にて編まれたる維新史は真正の歴史では無いと譜代藩系統のものは主張するのである。余が青年在京時代には大分こんな議論がやかましく、曰く何曰く何と扭曲されたる記述を一々指摘して口角泡を飛ばしつゝあつた。当時余が学友に一人旧会津藩の出身者あり、頭腦明晰成績拔群であつたが談一たび維新史に到れば慷慨悲憤多少常軌を逸しては居らぬかと疑ふばかりであつた。余は此の知友の東道により同藩出身の名士に接するの機会を得た。曰く南摩^{ママ}綱紀（号羽峯 会津藩唯一の老儒、当時高等師範教授）、曰く山川浩（古き陸軍少将西南役の殊勲者後に高等師範学校長となる）、是等両士は殆ど同一型に出来て居り、何れも質実剛健建古武士の風あり、景慕渴仰に堪へなかつたのである。中にも羽峰^{ママ}先生には数回其警咳に接したが、維新史の談は成可く避けられた方であつたけれども、偶其片鱗に触るゝ時は慷慨の気眉宇の間に溢れるよふに感じた。或時末廣鉄腸先生（余が郷里の大先輩にして、永く朝野新聞に主筆たりし人）に是等会津人の話をした時、先生の曰くに会津藩は藩祖保科正之があを通りの明君であつて、山崎闇齋の学統を伝へ、忠君思想の陶冶せられ居たことは恐らく各藩無比であらふ。維新の際、勢ひの走るところ偶順逆を行まり、有為の人物を沢山殺したことは国家の為惜みても尚余りあり、其れが爲、会津人は概して雌伏の状態にあるのは同情に堪えない云々——春風秋雨六十余年、天運循環して茲に昭和の聖代におよび、畏くも秩父宮殿下は其妃殿下を此の保科家より納れさせ給ひしことは大に意義あること、拝察し奉るのであるが、当時会津人は此思召しを聞き、何れも往時を追懐して感泣に咽んだことは当時各新聞の伝ふるところであつた。以上記述、道艸過ぎて相済まぬが、元來が昔語り思ひ出の記であるからつい／＼筆がすべつたのである。次号よりは愈お約束の記事に入る事すべし。

兒女避兵男枕才、流離生死果如何、懷人情向愁切切、感世心徒裏多、乱後江山空涕淚、客中日易蹉跎、稍然独■僧房燭欲和少陵同谷歌

^{ママ}南摩羽峯

(7) 掲載日：昭和9年11月8日

余が初めて渡邊翁の警咳に接せしは、前掲明治三十三年十月、宇部小学校増築落成式の直後、紀藤氏へ村祭のお招きを受けたる時か、乃至は翌三十四年四月、琴峰翁還甲賀宴の時かと思惟するが、此処日記をかぎて明確ならざるも、多分前者の方であらふ。当日藤山の僑寓を出で、路を宮の原より大小路に取り、既に紀藤邸にさしかゝらんとせし際、後方より来る人あり。此間少し距離ありて分明ならざりしも、鬚髯の風貌がかねて何処かで見知りある渡邊翁なることをたしかめ得た。間も無く追付かれ、其出逢ひ頭にあんたも今日は紀藤氏へご登城であるか、わたしも是から登城をしまし云々と、微笑を帯び、諧謔まじりに云われた。夫より話しつゝ紀藤邸に入つたが、既に広い座敷に可なり一杯の来客があつた。定めし此時も、宇部の有志株は網羅されて居たであらふ。なるほど当時、紀藤氏の声望は宇部村の村大名なるやの観あり、紀藤の融資を受けぬのは何の誰々と石地藏の外にはない、と云ふ様なざれ言も時々聞くよふであつた。而て余は是等一、二回の訪問と観察に

よつて、如何にも万事に質朴なる純農本的の伝統、家憲あるべしと推定したのであつた。

当時渡邊翁は、沖ノ山炭鉱の経営が未全く其苦難期を脱せず、専心奮闘中であり、又、彼の宇部炭鉱界の権威者藤曲の佐藤清太郎氏が、同鉱の主任棟梁として復興的活躍を続けつゝありし時期なりしなり（沖ノ山炭鉱は普通に松浜炭鉱と呼べり。今の松浜町の内に新川小学校の西方字松浜に鉱業所を有せり）。其後は絶えて、渡邊翁とは会見の機会もなく、又、三四年の内に余が境遇にも大なる変化を來たし、越えて三十七年春より三十八年に至り、余は松山市の従兄が経営しつゝありし事業の補佐として彼地にあり、同年九月、所用の為帰宅滞留中、一二回訪問したことがあつた。別に切り込みたる深き意味もなく、赤裸々なる余が当時の境遇と、昨年創立せし愚妹経営の女学校等が話題に上りつゝあつたのであるが、翁は此時夙く苦難期を突破せられ、加ふるに日露役の好影響により事業次第に順調に赴きつゝ、尚進んで事業の拡張と飛躍を計画せられつゝあつたのであるが、斯く好況の持続と翁の人格の優秀とが相俟つて声望頓に揚がり、信用次第に渥く、当時既に宇部村重要の位置に陞られつゝあつたのである。

（此項次号へ続く）

（8）掲載日：昭和9年11月9日

前掲渡邊邸辞去後間もなく、翁より一寸來宅して貰ひたしとの葉書に接し、早速鳥邸へ訪問せしに、翁の曰く、先日概略は承知したが、尚今後の方針に付て如何に決意せしや、都合にて相談もある云々とのことであつたから、余は謹んで好意を感謝し、……実は昨年来、従兄の投資せる可なり大きな印刷所を預かつて居るのですが、政党の関係から日刊新聞をも併せてやることに成りました。私は大不賛成で、強く抗議を持ち込んでのですが、其効無く、既に五カ月余になります。毎月多額の損失で、折角順調なりし印刷業の方まで台なしになる状態になります。そこで毎度、此損失の補填金を請求するけれども、仲々思ふ様に運ばず困り切つて居るのです。加ふるに、彼地は政争の劇甚なる処で、甲党が築港を計画すれば乙党は其裏側へ同じ事を目論み、乙党が汽車をやれば甲党は其反対側へ電車をやると云ふ有様で、従つて羽織ゴロが非常に多く、政党の関係からうるさく付き纏ふので、拙も私共の如きではやり切れないのであります。近頃又、悪性の取巻連が電鉄の話を持ち込みて居るのです。是が亦、非常な危険性を帯びて居るのです。こんな渦中に居ると、今後どんなことが持上るか不安に堪えないので、此処方針に迷つて居る有様です。私は熟く、真の実業家は能ふ限り政党的関係は避くべきものと信じ居ります。又、政争によつて社会及思想をどれだけ混乱腐敗せしむるかはかられず云々と、余が持前の政党罪惡論を持出したのであつたが、翁もうなづかれて……併し、今俄かに君がやめては先方もお困りであらふと、余は前途に甚だしき不安を感じてはいけませぬ故、若し当地方に相当の奉公口でもあるなれば、強てことはる積りであると答へたのである。其頃翁は……実は沖ノ山も、此両三年来、大分順調に運んで來て居るが、時世につれて従来の如き百姓タイプ（マヤ）でも将来の発展も出來ず、加ふるに今少々計画中の事もあり、旁々相当文筆の出来る人であり、亦、技術方面では第一坑内外の測量機械部の大略、並に監督署向往復文書の様な事を受持つ人が一人ほしいと考へて居るが、先年佐藤（清太郎）の在世中、時々君の話は聞

きたこともあり、相談する次第じやが、令妹経営の關係もあり、先方の都合がつけば一つやつてはどうか……余は答へて云ふ、炭鉱關係の事は從來全く無経験であります、何かお役に立つ方法がありますか……其内測量のことは、理論はそうむつかしきものでも無く、嘸實地の練習が緊要と考へ、又、汽機汽罐のことや石炭坑の概略は中等程度で、一ト通り学校で習つたことがあります、是迄とは全く方向違ひで、当分の処不安を感じず云々と答へると、翁は其点は充分に考へて居るので、測量及汽機汽罐は半年ばかり適當の処で実地練習をやつて来てはどうか。費用の点は相當の補助をする積り。幸、福原男爵が此方の専門であるから恰好な話をして貰ふであらう云々……、誠に行き届きたる且純情誠意に充ちたる応対ぶり、余も落涙せんばかりに感じたのであつたが……一応家族とも篤と熟議の上御返答をする積りゆへ、暫時の猶予を乞ふとて辞去したのであつた。

(9) 掲載日：昭和9年11月10日

余は本号以下、二三回に亘りて、宇部炭界の權威沖ノ山炭鉱復興の功勞者故佐藤清太郎氏のことを記すべき順序となれり。但、余が同君に接せしは、明治三十三年の秋より同三十六年八月十七日、厚東村持世寺温泉に於いて火傷療養中没せしまでの四年間に過ぎず、其以前の事は主として同君の後援者たりし藤曲の故佐貫〔東カ〕左衛門（耕一君の祖父）、伊勢治右衛門其他同家の人、及び宇部炭鉱界に於て同君と終始交渉を有せし渡邊翁、及び外数氏の談話を総合せしものなり。

君は文久元年^{〔ママ〕}月日、藤山村中笠井氏の次男に生れ、藤曲の小学校に於て初等教育を受け、其後縁あつて藤曲佐藤氏の後を継ぎたるものにして、其少年時代は或期間各所の坑内に鶴嘴を振り実地の経験を重ねしものなり。而も大稟の英才は、此時期に於て地方炭山の炭層、炭質、炭質延長、走向、傾斜、斷層及母岩等の状態について充分會得する處あり、遂に一般宇部炭鉱界の顧問格として尊重せらるゝに至りしものゝ如し。青年時代は、地方炭鉱經營者の元老、中山の笠井喜代松氏の幕下に属し、明治十九年、二十六才の時、厚南村南部炭田に於て雀田炭鉱（頭取故藤本治助）及び築島炭鉱（頭取故笠井喜代松）の開業するにおよび、築島炭鉱の主任棟梁となり、其後明治三十年、三十七才の時、沖ノ山炭鉱松浜に開坑するに到り、其主任棟梁として就職し、渡邊頭取を助けて奮闘努力、一時危殆に瀕せし炭鉱の運命を恢復し、爾來順調を続け、將に大に飛躍の時期に入らんとせし際、不幸にして明治三十六年八月十三日、同坑五ツ段坑内に於て俄然瓦斯爆発の爲瀕死の火傷を受け、厚東村持世寺温泉にて療養中、同十七日遂に易簣の否運に陥れり。時に年四十三才なり。

君は前述せる如く、各地炭層の地質的性状に明らかなりし而已ならず。又、頗る經營の才に長じ、其優越せる義俠的精神と相俟ちて一般稼働者の信望渥く、恩威ならび行はれ、皆呼ぶに佐藤親方を以てせり。宣なる哉、沖ノ山炭鉱は君が生前の功勞に酬ゆる為、營業継続中弔慰料として一定巨額の金員を年々其遺族に交付し來れり。亦以て、氏が功勞の多大なりしを察するに足れり。

因みに云ふ。地方炭鉱に於て、第一に汽機汽罐を採用し、以て機械部を分設し、職長修繕方等の名称及其職務を創始せしは前記雀田炭鉱の二箇所にして、其後宇部に於ては、明治二十一年、濁炭鉱ノ開坑に際し、始めて同じく汽力を使用せり。当時職長として就業せしもの、雀田に故村崎竹藏、築島に故小柳忠太郎あり。其下修繕方とした故川崎喜三郎、故岸崎秀式、故内藤辰三郎、故佐田初

五郎、故森永某々等あり。是等は皆、三池炭鋳、筑豊炭鋳等に於て実地の見習ひを経て宇部に輸入せられしものなり。此の開創も亦、佐藤棟梁の計画与つて力ありしなり

(10) 掲載日：昭和9年11月11日

◎佐藤清太郎君の小伝の続

余が始めて佐藤氏に接せしは、当地に來りし年（明治三十三年）の十月頃であつたらふ。同字に住み、又、或關係から挨拶に來られたよふであつた。色の黒い少し眼の窪みたる背の極めて高い肉の引きしまつた方で、一瞥して現場鍛錬の人と見受られた。ぼつ／＼話のうちに炭鋳の事があつたよふであるが、詳しく記憶せぬ。会見二三分で辞去せられたが、話ぶりがきび／＼して、何処かに俠氣的の風がほの見えた。之が最初の印象である。其後稍しばらくして、十一月頃であつたらふ。外国製網会社のカタログを持参し、各種ワイヤーロープの挿図に付説明を求め、最後にロープの接統法の挿図と説明がしてある處に付話をしてくれとのことであつた。

余は従来ワイヤーロープについては何らの実地的智識無し。但、使用する現場は度々見たことはある。特に中学の卒業前に、別子銅山（住友氏の経営）へ修学旅行をした時数々見たことがある。そこで余は、只書いてある通り訳して話した。各種破断強力、安全荷重、其使用上の注意等、極簡単な處である、其のうち荷重などが噸数で出してあるので、了解が六つかしい様であつたから、斤数に換算して話した。なるほど、常時はまだ噸数と云ふことが多くわからなかつた時代である

其れからワイヤロープの接統法であるが、是も説明の通り訳し、図に就て説明したけれども充分判りかねる様子ゆへ、小さい苧網を六本づゝ（ママ）二組切り來り、説明の通りやつて見たが、後に自分手に取りやゝしばらくやつて見るうち了解されたよふであつた。其時同君の話に、今炭鋳でやつて居るのは少々違ふようです、尚よく實際に研究さして見ませう——今使ふている捲網は磨れが高く、早く瘦せて困ります。何分金高の大きいものでなか／＼經濟に関係しますから、一つ外国品をつかつて見たいと云ふ考へから願ひしたい次第です云々、と云ふような話であつたと記憶する。成程、今から當時のことを考へて見れば、ワイヤーロープの製作は非常に幼稚の時代で、多分東京深川の日本製網会社一ヶ所で勿論良品は出来ぬ。多くは輸入を仰いでずいぶん高価に買はされたことであつたらふ。以後、五六年を経て余が炭鋳に入りし時も、ワイヤーロープはまだ和洋半位であつたと考へる。

（以下次号へ続く）

(11) 掲載日：昭和9年11月14日

◎佐藤清太郎君の小伝の続

前号捲網接統法のことは、其後幾日かを過ぎて來宅し、あの方法は結果が良いよふです、継手がふくれず、従つて磨れが少なく、多分今までの様には故障もあるまいと思ひます……と云ふような話であつた。其後時々見えたよふであるが、会話の要領はあまり記憶に残らぬ。其のうち、何んでも余が知つて居りそうなことを尋ねるのが例のよふになつて居る。或る時も古い百科全書を出して

返答をした事があつたが、問題は何々であつたか忘れて仕舞ふた。しかし実に感心な人であると思ふて居た。夫から翌年の夏頃であつたらう、マシンツールのカタログを持参して、挿絵に付色々説明を求められたが、是も前の捲網の程度で全く実地的の知識を欠いてゐるので、只文字の通り訳して聞かせた。しかし此不完全なる説明も相当の効果があつたか、大変感謝の意を表されたよふであつた。其後何かの事で同君の宅へ行つたとき（祭日^{ママ}？）、直方辺の人が来て居り捲揚機の組立図や分解図を繰り広げて話をして居たところであつた。値段が高いとか、製図料がどうのと云ふよふな話であつたが、多分鋳山監督署関係の書類の準備ではなかつたかと思はれる。沖ノ山炭鋳も、三十四年の下半期には最早多少の順調に変わり、そろへ捲揚機でも据え替へ、又、ダイヤ盤やボール盤位を構へたる修繕工場でも設ける目論見では無かつたと想像する。それから、三十六年の春頃何処かで逢つた時、炭鋳も次第に順調で多少いきが出来るよふになりました。株が五百円以上になりましたからと云ふよふな話であつたが、間も無く八月十二日には前記の如く変災に罹り、同十七日には遂に永眠の不幸を見るに至つたのである。余は当時、佐藤君の小伝、特に沖ノ山炭鋳の復興功勞者なりしことを書き綴り、山口の防長新聞と下関の馬関毎日に送り、掲載を依頼したことがある。之はせめてもの生前の知己に報ゆる、余の微衷であつた。余が佐藤君との直接交渉は、先ず前記の如く、誠に平凡を極むるものではあるが、是丈でも当時宇部炭鋳の全般の文化程度を考へる時は一頭地を抜出たるエラ者であつたことが想像せられる。自分の主務たる採鋳部のことのみならず、機械部の事にまで熱心に調査を進め、常に改良と進歩の精神に充ちて居たことは、前掲簡單なる記事によりても看守せられるのである。地僻隅にして交通の不便、随つて中央の文化に遠ざかり、当時炭鋳関係の人々には眼に一丁字無き人の多き中に、同君の行動は常に此時流に超越して居たのである。奇語す同君の子孫たる人、並に此功勞者の遺業に働きつゝある人は、渡邊翁の偉蹟を偲ぶと共に、同君の功勞を忘るゝこと無く、只一個の利害休戚のみに捕はれず、須からく宇部市公共の發展に努力すべきであると考へる。近来、時々此義務に反する風評を耳にするから序に苦言を呈したのである。

(12) 掲載日：昭和9年11月15日

◎佐藤小伝は都合にて暫らく前回にて打ち切り、本日より前掲余が沖ノ山炭鋳就職談の続に入る。余が沖ノ山炭鋳は、前掲の如く渡邊翁の同情深き懇話により、当時心中略決する所ありしも、尚暫時の猶予を乞ひ、其他前勤地の往復に数日を費やし、又不在中の準備など相応の苦難を嘗めしが、兎も角落着し、翌十月に入り（三十八年）、渡邊邸に到り就職に願ひしところ、翁も頗る満足せられ、斯く決定の上は成るべく早く上京すべく、又、序に炭鋳に俵田軍太郎と云ふ人が居るから、一応此旨話して置けとのことにて、此日余は始めて炭鋳なるものゝ門口をくゞつたのであるが、愈渡邊邸を辞せんとする時、余は云ふ。かく将来永く御厄介になる上は、私の許はらざる告白をして置きますが、私には一の性癖があつて自分ながら困つて居ります。其れは性質が直情で、御都合主義、即ち迎合がチヨツトもやれないのであります。腑に落ちぬことはゲンへ遠慮なしに云ふ癖があり、良い加減に自説を枉げないのです。是が従来私の出身上に障害を与えて来て居ります。此点は、將

来御遠慮なく御矯正を願ひたい。其代り、責務は心身の続く限り決して粗漫に流れず果すつもりであると云つたら、翁も大にうなづかれて充分に聞き置くべく答えられた。其れから事務所に到り、刺を通じて席につくと、事務長さんが云ふ。ハーあんたが香川君か——頭取から話は聞いて居たが、愈きまったか——親方然たる物云ひぶりで、翁とは大分に調子が違つて居るわいと直ぐ感じた。夫から段々余が学歴などを聞くから、余は腹臆^[ママ]なく修飾なく答へたが、最後に英語の事を聞くから、至つて未熟であり、近来余り読まぬから多少退歩して居らふと云い、中学を出て高等中学に入り一年余りやつた位であるが、文字や歴史や哲学のよふな書物は読みたが、硃工等に関するものは曾て手にした事はないと云つたら、ナーニそれ位で充分であると云つた。此調子から察して、此人大分学歴でもある人かしらと思ふた。事務所を辞して居能の方へ廻つて帰って来ると、古谷彌一郎氏(元藤曲の人。当時居能に住す)出逢つた。ヤーしばらくでした何処へ行かれたと聞くから、余は不用意にもウツカリ今日は鳥の渡邊さんの処へ行つてから炭鉱に行き、俵田と云ふ人に逢つて来たと云ふたら、怪訝な顔をして、何んで又炭鉱などへ行つたかと頻りに尋ね、マー来給えへと強て自宅に連れ込み、頻りに用件を聞くから、イヤ少々用談があつたとお茶を濁しつゝ、今日会つた俵田と云ふ人は大分学歴でもある人かと尋ねたら、あれかネー、あれは僕の方とも少々縁戚の関係になるが、別段学歴などは無い。しかし頭もよく仕事も捌ける方で、昨年渡邊さんが大阪から呼戻した云々。(以下次号)

(13) 掲載日：昭和9年11月17日

(前号沖ノ山炭鉱より帰途、古谷に逢ひし話の続) 夫から古谷に問はず語りでしばらく此事務長さんの話をやつたが、あまり逸事に亘るから略するとして、前に返りて頻りに余の今日の用談を尋ねるから、強く隠すことも無き故、実は渡邊さんが炭鉱へ出て見ぬかといはれ、かく一〇の次第で近日上京をすることになつてゐるが、他へは成可く漏らさぬやうにして呉れと云ふと、同人も大いに賛成して、それは誠に良い都合である、炭鉱も一時は随分困難であつたが、此処兩年よほど順調で、近頃では渡邊さんの懐中も大分にふくらんだ様子。それにあの通り人物も良い。同情に富みた方であるから前途有望ぢや。何でも近きうち拡張をするやうである。佐藤の亡くなつたのは淋しいが、しかし大丈夫であらう云々。余は、渡邊さんの話し振りから同人が生前に何か話したこともあるやに思つたが、此点は佐藤にも感謝する次第ぢやと云ふて別れたのであつた。

それから上京の準備に取り懸かり、十月十一日の出発途中大阪の親戚に一泊、着京後、直に渡邊翁の紹介状を携へ、福原男爵を内幸町の兒玉邸に訪問せしに、折柄不在にて(当時王子火薬製造所技師)、翌日王子へ訪問せし処、先日渡邊さんの来簡により一箇所交渉中であるから、三四日の後に来訪せよとのことにて、夫より測量学校の方を調査せしところ、芝の攻玉舎か神田の順天求合社がよいと云ふことで、色々の関係から順天の方へきめて入学の手續を了した。勿論夜学で、六カ月卒業である。当時主任教諭の話では、余が如き事情の者もあり、四十歳以上の人もほつ一見受られた。学科は主として各種測量器具の説明、測量実施要論の外、数学は代数及三角法の初歩位で別に骨の折れることもなく(科外として自宅製図を課した)、^[ママ]首要なる勉強は毎日曜日に芝公園に

於て、各種測量法の実地練習をすることであつた。是れは主要の目的故、欠かさず出席した。

機械の方は男爵の斡旋にて、工学士黑板傳作氏の経営せらるゝ月島機械製作所へ入所することゝなつた。此方は男爵の同窓にて（黑板文学博士の令弟。肥前大村の出身）、工場は最近の設立であらふ。総てが新しいように見受けられた。相当に広く、別に洋館二階建の設計所があつて、常に八九人の人が精々とやつて居た。

余は此処の一室に奇寓することゝなり、初めはトレースより、後に簡單なる機械部分の設計製図、終りには汽筒其他の稍複雑なるものに進んだ。其間工場に出て、各職工の作業を見学することもあり、学科は設計室にある書物を借り受け、又自分に購入した。翌三十九年三月迄ミツチリ勉強したから、先ず機械一ト通りのことは覚えたやうであつた

（次号には磐城炭鋳見学の事を記する）

（14）掲載日：昭和9年11月20日

◎^{〔ママ〕}盤城炭田の見学（明治三十九年）

三月中旬に入り、余が退京期も既に迫りたる折柄、所主黑板先生に伴はれて^{〔ママ〕}盤城炭田の見学に趨けり。上野より鉄路を海岸線に取りて、史上に著名なる勿来関趾を過ぎ、やがて湯本駅に着き下車、^{〔ママ〕}当夜盤城炭鋳の技師長にして、黑板先生の同窓たる倉田工学士を訪ひ、明日より数日間の見学指導を依頼し、帰宿せり。是は後章にも詳述すべきが、当時炭鋳の一部が出水に逢ひ排水の最中なりしが、此時代、まだあまり有効の排水ポンプ無く、多大の困難を見つゝある際、何事か両氏の間に往復ありて、この点の用向も兼ねられたるが如くなりし。^{〔ママ〕}盤城炭田とは、福島県盤城国石城郡湯本町の西北数哩の間に亘れる炭田にして、当時の^{〔ママ〕}首要なる鋳業所は、前記盤城炭鋳を主とし、入山、内郷、三星、小野田などの諸坑あり。茲は、関東唯一の炭田にして、炭質は我宇部の五段炭に類似し、水分灰分共に多く、発熱量も五千カロリーの内外に止まるも、地東京に近き故、是より遙かに良質なる九州炭の門司に於ける価格と匹敵する位に高価を維持せり。炭層は我五ツ段炭よりも厚く、五尺乃至六尺に達する所あり、九州各炭田と等しく、始終瓦斯の発生を見る為、嚴重なる警戒の下に安全燈を使用して居れり。当時、各坑とも採炭は八分通り東京に移出する由なりき。

明治三十九年三月日、^{〔ママ〕}是余が始めて炭鋳の坑口をくゞりたる日なり。黑板先生も同様、坑内着に着換へ、左手に安全灯を捧げ、首には手拭ひを巻き、烏打帽をいたゞき、右手に三尺杖を持ちたるいでたちは、近く始まらんとする余が沖ノ山炭鋳十八年生活の先駆としても記念すべき日なりしなり。倉田技師長外、保安係の案内にて斜坑を下り、前述排水箇処の作業を見る。其処にも十台に達する排水ポンプを据え付、機械方等は真裸になり、必死と作業に従事しつゝあり。蒸気罐をあれこれと通じある為、暑きこと云ふばかり無く、曾て体験なき我々には殆ど堪へざるが如し。而も、此時まだ高水頭汽筒の無かりし為、例のスペシャルポンプ類似のものにて、最低箇処よりは段組となして排水し居れり。其作業の困難、察するに余りあり。余は此漏水は如何なる箇処より来りたるやにつき質問せしに、此辺は地質が非常に混乱錯綜して居り、石炭層母岸に入り交りたるグラニットの含水層に堀あてたる為なりとのことなりし。当時、我邦に於て坑内高水頭に使用すべき輕便なる

唧筒の発明及輸入なかりしことは、今より不思議に感ずるほどなり。此見学中、黑板先生の話しては東大教授工博井口在屋氏が専心、離心動ポンプ（セントリヒューガルポンプ）に就て研究を重ね、揚水頭九十呎位のもの出来ておるとのことであつたが、其後、此離心動唧筒にガイドヴェーン（導き羽）の工夫を加へたる、高水頭タービンポンプの輸入せられしは、二三年の後にして、宇部にては、沖ノ山炭鉱に余が勤務中、大正二年、神戸三菱造船所に製作せしめしものが其最初にて、是は結果思はしからず。翌年東京石川島造船所にて製作せしものは、相当の能率を挙げ得たり。参考の爲附記す

(15) 掲載日：昭和9年11月22日

◎前号盤城炭鉱の続

盤城炭鉱の排水はなかへ困難にして、減水遅緩毎日三四時に過ぎず、或箇所では堅坑の捲揚機を用ひ鉄板性のバケツを昇降して排水しつゝありたり。之はもと米國某無煙炭地方に於て坑水に多分の酸類を含み、普通ポンプの使用に堪へざる所にて行ふ方法也とか。翌日も同様入坑し、各片盤より唧筒座、坑内捲揚機の箇所等を巡視し、出坑しては事務所に入り、坑内図の研究より安全灯の取扱ひ方、其他炭鉱経営上^{〔ママ〕}首要なる箇條は一と通り質問し、又筆記する所ありたるが、既述の通り、排水の爲所員一同殊の外多忙を極むるを以て、本日にて此坑の見学を打切ることせう。

第三日間は入山炭鉱に行く。同鉱技師長も同じく黑板先生の同窓にて、以前は九州赤池炭^{〔ママ〕}に勤務せられしとか。本鉱は皆堅坑にして、捲揚機により入坑せり。是も生来始めてにて、明るき坑外より可なりの高速度を以て下降するに従ひ、赤色となり、紫色となり、遂に暗黒界に入る。あまり気味のよきものにもあらず。まして此坑は前^{〔ママ〕}の盤城炭鉱よりは瓦斯の噴出多しとかにて、灯火の警戒一層嚴重なるやに見受けたり。坑夫の鶴嘴を振りつゝある切羽には、炭層よりの出水と共にブツと音を立て、おるあんばいは、我々如き全く不慣れのものには殊の外の脅威であつた。翌日は午前中より事務所に入り、先^{〔ママ〕}の盤城炭鉱のと同じく研究事項に付き相当懇切綿密なる指教を受け、益する所多大なりき。

第五日目は、此地の各炭鉱、内郷、三星、小野田等、坑外状況を巡覧し、打ち切りとなせり。

以上五日間に亘る見学に於て、盤城炭^{〔ママ〕}の鉱業につき概略の観念を得たる訳なるが、曾て素養なき此見学も、将来自己の職務の前程であり、又第一印象であるから、観るもの聴くもの悉く興味の種ならざるは無く、恰渴せる者の水に於けるが如く深刻なる印象を与へたるは、誠に有効なる見学として、黑板先生始め、前記各炭^{〔ママ〕}の技師諸君に向ひ深謝の意を表せしところなりき。

三月日帰京後は、主として測量講義の方へ出席し、講習證書を受けしが、是よりさき余が進言により測量器械の購入を為すべき命に接し、順天の教諭に諮り、玉屋商店輸入の米國ガーレー式トランシット及其附属器具外、簡易測量器等を購入せり。是も恐らく宇部炭^{〔ママ〕}に正式の測量器を輸入せし最初にして、さきのタービンポンプと共にレコードを造りたるものなり。

やがて福原男爵、黑板先生を始め、工場員各位の永き懇情を謝し、某旗亭にて清楚なる別盃を挙げ、廿八日夕東京を發し、途中大阪下車。三十一日朝無事帰宅。翌四月一日渡邊邸に到り、在京中

の経過を審に報告し、伴はれて事務所に行き各員への紹介を受け、又鉱業所を隈なく一巡せり。愈余が炭鉱生活は今日を以て生まれり。

(16) 掲載日：昭和9年11月22日

余が沖ノ山炭鉱に出勤したる当時の組織は、勿論宇部炭鉱に普通なる株数四百の匿名組合にして、頭取の下に数名の重役ありしも、諸般の事務は殆ど頭取の独裁に帰し、事務を大別して地沖の二部となし、地事務所は即ち今日の採鉱部にして、出納掛一人、棟梁六人、帳簿係一人、買入係一人、監量係二人、外雑係一人、計十二人に過ぎず、此内出納掛、事務長を兼務せり。

沖事務所は即販売部にして、仕切方一人、補助一人、販売係二人、補助二人、沖出納掛一人、沖監量係二人^(ママ)計九人乃至十人にして、地沖合計廿一二名に過ぎず。而も其後死没或は退職により、二十九年後の今日にては当時よりの勤続者は五六人に過ぎず。転々滄桑の感無きを得ざるなり。稼働者の取扱は全部納屋制度にして、地沖共に数名の納屋頭に分属し、賃金の支払、人事上の取扱等、悉皆此納屋頭との交渉に属せり。

機械係も棟梁の兼務にして、修繕方、捲方、火夫、ポンプ方等の機械取扱品人は納屋頭と同意義なる職長の請負に帰せしなり。

当時の出炭量は一日四百箱乃至五百箱の間を上下し、今日に比すれば実に微々たるものなりしも、当時宇部にては沖ノ山に稍匹敵するもの、東に見初炭鉱あるくらいに過ぎざりしなり。

当時宇部に於ける炭鉱経営上の組織は、大要前述の如くなれども、尚翻つて宇部炭鉱に通用せる組織経営の重要精神に就て縷述するところあるべし。

宇部炭鉱の歴史は元禄年間に遡り、かの常盤池構築の際に起ると云ひ、其後幾多の変遷を歴て明治維新に入り、村有志により宇部共同義会なるものが発せられ、村の公共経営に関する事件はこの団体の力に依拠せしものにして、村政に貢献せし功績は実に顕著なるものあり。即ち宇部村内石炭鉱区も悉皆之を同会の所有となし、経営希望者へ便宜其希望の鉱区を借り受け、斤先堀（採掘高により賠償金を出す）を為したるものにして、従つて他郷人の経営を許さざるの内規ありたるものなり。此方針は、宇部各炭鉱が其組合員に交付せし組合券にも宇部、藤山の在住者にあらざるものは組合員たる事を得ずとの條項を挿入せるにても明かなりとす。

(この項続く)

(17) 掲載日：昭和9年11月23日

宇部の石炭鉱業は、既記の如く共同義会の方針に従ひ、容易に他国人に指を染め得せしめざるものとして永年間遵守せられたるのであるが、此制度も時の推移と共に廃滅に帰し、今日では開放の姿にあるが、其精神は依然として宇部旧来人の間に厳存して居るのである。かの近年まで稼行したる西新川三炭組濁炭鉱が、明治四十五年に全然宇部人の経営に移りし以前、大阪人によつて社長始め多数株主を占領せられたる時代には、随分地元人からの圧迫が加はり、其珍話を耳にしたこともあるが、是は余が直観実歴ならざるを以て暫らく之を据くことゝし、此の如く排外精神に導かれたるに

は又止むを得ざる原因もあるやに考察せらるゝ。従来宇部炭鉱の成立は他郷に見ることを得ざるの珍風景にして、即ち一の砦区につき同志相寄り稼行を開始せんとくろむときは、第一に其頭取を選任し、資本金及び株数を定め、是等の発起人は其資力に応じ、各引受の株口を決定し、残余はそれ等の人々の親戚縁故者乃至地元部落人及公私の交際先に対し、之を頭取の名によつて分配するの習慣にして、かつて公募したることなく、又一方よりは其企業を耳にする時は種々の縁故をたどり、其株の配分に預からんと争ふの有様なりしなり。もちろん其頭取及主脳者の信用程度如何により多少の差異あるも、概して此の如く、例令其見込みが充分でなくとも、贈与せられたる際には大抵の場合甘んじて之を引受け、返戻する等のことは無かりしなり。尤も厚南、小野田等に企業せられるゝものは、所謂西方炭鉱と称し、失敗の歴史多く、時々難色あり、株口の募集に苦しむ場合ありしも、其多くは如上の事例を以てせり。此の如く、我宇部石炭砦業当初の精神は、実に郷土愛の権化とも云ふべき立派なるものにして、同一事務所に出勤する事務員は互ひに相倚り相信じ、其間一毫も私心なく、偏へに其業績の成功を祈りたるものであるが（勿論例外もある）、此の如き状態は成だけ他郷人を相手にせぬやう勉め、従つて亦他郷人との接触機会に遠ざかり、以て狭固なる宇部共同精神が成立したのである（自然の地勢や郷土歴史も含んで居る）。而も、此石炭鉱業は、近き二三十年来多少の起伏盛衰はありたるも、概して好況を持続し、其莫大なる利益を以て各種の事業が計画せられ創設せらるゝに及び、東より西より俄に人口の増殖を来し、將に大宇部の建設を見るに至らんとするは大に欣ぶべしとするも、此共同的精神は極めて少数の例外あるを除き、毫も是等大多数の外来人に及ばず、依然として旧来人に限られ、而も漸くにして其範囲を縮小し来り、益々少数者の膨大を見んとするの傾向にあり。是れには近代の経済機構のもたらす原因も存するが、就中此狭固なる共同精神の働く影響大なりとす。而して此の如き趨勢より来る人心の離反は、宇部市将来の発展に向つて大なる痛患となるべきものして、須べからく猛省すべきであると感ずる。

公私に論なく、当局理事者は須べからく一般勤労生活者に対す機会均等の精神によつて、情実彙縁に囚はれず、無能を排し、有能を挙げ、公平無私の態度を持すべきである。此の根本精神の發揮を措き、ヤレ報徳会の、ヤレ修養会の、ヤレ講演会のと年中汗水をたらし、口を酸つぱくしたところが、それは古諺の千日の説法屁一つである。

(18) 掲載日：昭和9年11月25日

余が沖ノ山炭鉱（松浜事務所）出勤当時の仕事は、既記の如く坑内外の測量にして、従来棟梁の手によりて描かれたる概略なる図面の追加及び訂正等より、汽機汽罐等の製図、之は主として鉱山監督署へ提出するもの、其他出納掛りに属する文書の手伝位に止まり、至つて閑散なるものであつた。少々予期と違つたよふな感じがあつたが、可成含忍して万事へい……へいといつたのである。夫で当時同じく渡邊翁の頭取たりし神原炭坑（今の東新川紡績会社の南方に開坑）の坑内測量をやつたり、又物に依頼があつて長陽炭坑（今の藤曲より沖ノ山〔ママ〕に出る道路のつきあたり墓地の近処に開坑）の測量をやつたこともあつた。少し閑散すぎて脾肉の感がなかつたことも無い。こんなことで三十九年を終り、四十年に入つたが、一月の総会終了後、渡邊頭取から、当時まで棟梁の兼務で

あつた機械事務を分割して別に機械部を置くから機械係になれとのことであつたが、余は未だ実地の経験に乏しいから今しばらくと云つたが、炭坑の機械係は職長の相談役である、技術は職長の責任となつて居るから、唯皆の者が油断をせざる様督励すればよろしいとのことで、兎も角受けることになつた。之れで余は本社員の末班に加はつたので、今迄は雇員であつたのである。

職長は岸崎秀一君で、前号厚南村築島炭坑職長小柳忠太郎の下に修繕方であつた人、又此外の同僚連は当時殆ど宇部の各炭坑に来て職長と成つて居た。即、川崎喜三郎は見初炭坑に、内藤辰三郎は長陽炭坑に、佐田初五郎は湯炭坑に、村崎、小柳の両職長は、築島終業後、宇部に来て鉄工所を持って居たとのことであつたが、余が炭坑入りの当時には廃業して居たよふである。以上列記の諸氏は、兎も角宇部に於ける炭鉱機械取扱の草分即開拓者と云ふべきものにして、宇部の炭鉱史を編む時は其名を逸すべからざるものと考へる。是等の人々は勿論正則に機械学をやつたことも無く、教育は僅かに小学校位に過ぎず、唯三池、筑豊地方の炭坑にありて実地の見習を続け、機械の取扱方を覚え得た人々にして、極低級の技能に過ぎざりしも、当時の宇部炭坑の程度では恰好の人々であり、又是以上の人を求むることは至難の状況にあつたのである。

上記の内、村崎竹蔵なる人は、此連中のオーゾリチーであつたよふで、恐らく宇部炭坑機械の実地教育は殆此人に依ること多きやに察せらる……鉄管の連結に必要なワシヤ類に、普通専売ワシヤと呼びしブリキに石綿を附着せしめしものは取扱が至て軽便で、効力も割合に多く、各炭坑に於て永く賞用せられたるが、是は同氏の創製にかゝるものなりと聞けり。

(この項続く)

(19) 掲載日：昭和9年12月8日

豫山衰微恙あり、筆硯を廢するもの句余。客あり、余が前回に於て宇部共同精神を批評せしことにつき注意を与ふ。曰く君の云ふところ、敢て正鵠を誤れりと云ふにあらざれども、如此は徒らにブル党の自尊心を傷つけ、君の一身にとり大なる不利益なるべし云々。余は深く客の好意を謝し、且曰く。余は君の知れる如く世の所謂右党にもあらず、又勿論、左党にはあらず、不偏不党一君万民の国体觀念に立脚して社会を觀察し、批判せんとするものである。況や宇部は余が第二の故郷にして、三十余年、此土の水を飲み、此土の穀を喰ふ。豈報恩の心なくして可ならんや。余が苦言を呈するもの、実に愛市觀念の逆りに外ならず。乞ふ之を諒とせよ…余は尚此狭固なる宇部精神につき、一二の解説を試むるべし。最近、三四十年前の宇部を知るものは長門の東端、海面に斗出したる交通不便なる一僻邑なりしことを首肯せん。当時の中央都市は船木町にして、山陽道に位置し、藩政時代宰判の置かれたるところ。維新後、郡役所、警察署、税務署も、尚茲にあつた。

明治三十四年五月二十七日、山陽鐵道が下の関まで開通せしときも、東は船木駅(今の厚東駅)、西は小野田駅として之れに達するには、何れも三里の悪里道を通過せねばならぬ。宇部駅の設けられたは尚六七年の後に属し、宇部鐵道の開通したるは大正三年一月にありて、山陽幹線の全通後、約十三年の後に於てす。甚だしいかな、宇部人が長く此交通の不便に無頓着なりしことは

顧ふに、比渺たる四里の宇部鐵道は、宇部今日の發展に対し、石炭鉱業と相俟ち、尤重大なる意義を有する

ものと云ふべく、恰も四肢末端の小血管が初めて幹軀の大動脈に接続せられたるが如く、人口の増加、文化の輸入、俄然として旺盛を来したる事實は宇部発展史上に於て特筆せらるべき事と考ふるなり。尚、此項は後回に詳述することあるべし。

上述の如く、自然の地理的環境は久しく宇部人をして他郷に出づることを少くし、又他郷人の移住することも稀に、地味は豊沃にして境域は広く、人口の割合に耕地の多きは天府の楽土と称すべく、永く武陵桃源の夢を貪りつゝあつたのである。此自然と歴史が、余の所謂狭固なる宇部共同精神を造り上げたので、前回に述べたる炭鉱の特異なる組織経営法も、畢竟は此精神のほとばしりに過ぎないのである。

(20) 掲載日：昭和9年12月9日

余はこの地、武陵桃源郷に入りたる後、須臾にして其人情風俗の一斑を窺ひ得たるが、其第一は事大思想の極めて旺盛なることである。詳しく云へば、万事が親方まかせで、随分の不平不満でもマー大将衆の云ふことぢや従はねばなるまいと泣寝入に了ることである。若しも之を反対に理屈を持ち込めば、其者の人気にさわり、色々の不便を来たすのである。勿論、防長人は事大思想に富むことは兼てより聞いては居たが、正可之程にもあるまいと思つた次第である。

此の事大思想語を換へて云へば、独裁政治乃至寡頭政治は後までも神聖なる選挙権にまで足跡を印し、彼の村会議員候補者を各区に割り当て指名し、投票を強要しつゝあつたが、是は近年に宇部に入りたる人々の尚記憶することであろう。夫れから今一つは、大藩老職の封邑なり陣屋地であり、士族の家も多いなかに、江戸文化の痕跡をとゞむることの少きには意外であつた。二百余年続き来たつた年中行事は更なり。婚礼年賀の披露饗宴ぶり等も、殆んど異例に属するものであつた。是等の現象は、重就公あたり藩政改革の影響でもめるかと思つたが、そは老職の封邑で、同じ士族と云ふても他の城下町居住の夫の如く、参勤交代の勤めがなかつたから、自然中央文化に接触する^(ママ)の機会が乏しかつた所以であらうかとも考へたのである。尚最後に一つの不審は、こゝはザット一万石の大村であり、老職も居られ、又士族も多い。特に山口県は維新の際多数の人物を出したから、自然此土地からも名を挙げた傑物があるだろうとしばらく探索して見たが、案の外、之れも乏しいようである。然し、越後公は維新史に赫々の名をなされて居るが、是は宇部の人では無く、徳山侯の出であるから其人格は徳山で養成せられた人である。軍人には飯田中将があるばかりで、外は皆大佐どまりで、夫れも極めて少数一二人であらふ。

本稿の初めに国吉明信翁のことを書いたら、其後或人から夫れより前に藤本晋一と云ふ傑物が居たとの話もあつたが、なるほどエラ者ではあつた様に思はれるが、不幸早逝されて成功者と云ふ部類には入つてゐない。此通り書いて来れば、過去の宇部は全く特異な人物無しと云ふことになる。

(この項続く)

(21) 掲載日：昭和9年12月12日

是も前陳の武陵桃源郷のたゞりで無理に他郷に出で、苦しまんより、宇部に居ても人並に働けば

安気に暮されると云ふ保守性の原因では無いが、埋骨何期墳墓地人間到处青山の意気は至つて乏しいよふである。併し近頃はブラジル辺にまで押し出す輩もあるから一概には云はれぬかも知れぬ。併して概して古ぐれた人物の少ないと云ふ評は多少当つて居るよふである。他国では永い間人形芝居の足使ひをやつた者でも帰つて来て少しばかり気きいたことを云へば天にも地にも掛けへの無き珍重ぶりで、一足飛に頭使の立役者に成る。実にお芽出度いことである。尤も之れには多少の因縁もあらふ。皆が皆までそうでもあるまいが、兎に角こう云ふて来ると、宇部開闢二百年來宇部人の知恵は渡邊さんの一身に集まり来り大光明を放たれたよふに見ゆるが、サテ吉保先生の此辺の御観察は如何でござるか伺ひたきものである。

宇部人は稀なる幸運兒

何と云ふても宇部人位の幸運兒は稀であらふ。祖先伝來石炭と云ふ宝物を自分の倉に仕舞ひ込み、是れが強窃盜の掠奪にも逢はずして国家の隆運に遭遇し、ぼつりへ出しては売り、売りは溜めた其金が今日の宇部を築いたのである。波の山なす荒浪を凌ぎ、胸衝く^{ママ}檢坂を乗り越へて、遠き他郷に運命を開拓したのは天地月髓の差がある。夫れにしても今六十才以上で曾て炭鋳に関係した者は殆んど総てが鉄砲袖に繩の帯、終日草鞋ばきで働いて来た人々である。二十三十若い人達は、時々こんなことを考へて見るや否や。業界の好況に乘じ眉をひそむる悲喜劇が時々噂の種となるは遺憾千万である。(此の項続く)

(22) 掲載日：昭和9年12月13日

宇部の人口七万五千。此のうち純粹の宇部人は二万に過ぎぬであらふ。否、是より大分少ないかも知れぬ。残り五万五千以上は皆移住人である。今日の趨勢より察すれば、十万に達するはまた、く間であらふ。しかすれば此内外人口の距離は益々甚しくなり、今も絶へず閃光を見せつゝある。○は益々甚しくなりはせぬかと、杞憂をいだくものがある。此困難なる問題を甘く処理して行くべき大きな人物の卵は、余は不幸にして多く見付からぬよふである。今日宇部の社会表面に立ちて其部將の旗をふりつゝある四五十の人士のうち、相当の教育をうけたものもかなりあるそうぢやが、而も是等は日露戦役後の好景氣のもたせし物質的陶酔的の空氣ばかりを吸ふた人々で、滿州事變以來國際困難から眼が醒めて古い虫喰本の中から復活した、神ながらの道、日本主義、東洋精神と云つた人物を作る教育は受け無かつた人々が多い。

毛唐流の我利我利亡者にあらんずば、オツチヨコチヨイの小伶俐しい人間が大部分。ネツカラ腹の大きな人間は見付からぬ。況んや僅かに小学校を出たか出ぬかで、深い教養のある筈がない。それでも財産が出来れば名誉欲が起り、○○の投票を○○して、名誉職になりすまし、鬼の首でも取つたよふに喜んで居る。お芽出たいことである。これで市政がどうの、予算がどうのと云ふた処が猫に小判で、逆も助役や課長連とは太刀打が出来ない。つまりは例の事大思想お任せ主義に終るより仕方があるまい。何とか今少し改善の方法は無いものか知ら！……筆勢が思はず突走つて少々脱線したやうだが、なにもこれも将来ある宇部を思へばその老婆心。決して悪くとつて貫つては困る。これから愈本論に戻り昔語りの軌道へ筆を向けるとしよう。